



夢を「かたちに」、 夢に「いぶきを」

中部電力株式会社 常務取締役 河津 譽四男
執行役員技術開発本部長

電力業界では1990年代まで、急速な経済成長に伴う旺盛な電力需要の伸びに対応するため大規模・大容量化に関する技術開発を中心に推進してきた。その後も、バブル崩壊・失われた十年、規制緩和など時代の大きな変遷があったものの、その時々の電力事業を取り巻く環境に即応した技術開発を行ってきた。

その様な変遷の中、世の中にはその時代に合った多くのキーワードが生まれており、最近では構造改革・選択と集中・産学連携などと共に、今急速にMOT (Management Of Technology) と言う言葉が、製造業を中心に流行している。

今後の技術立国「日本」において、イノベーションこそがビジネス拡大の推進力であり、それを強化するためにMOTが必要不可欠である、と言う論理のようである。

たしかに、会社によって業種、社風、目指す方向が違い、横並びのマネジメントはないため、MOTのような考え方に基つき技術開発を行うことは、非常に重要なことだと思われる。しかし、このMOTには(必ず言われるが)正解はない。

結局のところ自社の特性、市場、経済の動向などあらゆる周辺情報を総合的に勘案して方向性を見だし、迅速に決断する必要がある、その手ほどきとしてMOTがあるような気がする。

いずれにしても、技術開発を進める上での基本は変わっておらず、

- ・ 未来イメージ(顧客ニーズ)から研究テーマを探る
- ・ 研究者、技術者がやりがいをもてる環境を作る
- ・ トップと担当者が同じベクトルを持つ

以上のことは最低限、頭に入れて技術開発を進めていきたいものである。

技術開発の計画・立案に、MOTに示される考え方を取り入れても、進むべき道は自分で探すしかなく、

- ・ なぜ、今この技術を
- ・ なぜ、この目的のために
- ・ なぜ、これだけの費用で我々がやるのか

など、常に問い続け答えを探ることが重要であり、このことはいつの時代も変わらない。是非とも、情熱をつぎ込み試行錯誤を重ねていった技術開発が、企業の発展に大きく寄与するものになりたい。

もう一つのイノベーション（ここでは、顧客ニーズを軸としたと言うより、新規軸の技術革新の意味が強い）として、研究者の熱意から生まれる物がある。NHKのプロジェクトXを見て技術者ならあこがれを感じる事が出来る、そのことである。

この意味において、生産性や効率を過度に意識した管理過剰なMOTの導入は、研究者のイノベーションを阻害するリスクが多分にあることは、留意が必要である。

研究者のイノベーションを発揮させる仕組みはいろいろある。遅ればせながら、中部電力でも研究者の夢を追いかける仕組みを本年度から発足させた。「夢研究」と名付けたこの制度は、製造業などの研究所では既に行われてきているようであるが、研究者が長年温めてきた発想、会社の中ではなかなか認められないが研究者の熱意として是非やってみたい思いつきなど、夢を「かたち」にして、さらに「いぶき」を吹き込む制度として考えた。通常の研究費予算の枠組みとは別に研究者の申告により実施する内容としている。

まだ、この制度は始まったばかりではあるが、価値ある研究を選択し、その成果をしっかり認知することにより、研究者のイノベーションを高揚させ、いつか夢を「かたち」にさらに「いぶき」を吹き込み、その成果が世界を席卷する夢を見ている。

なお、表題は中部電力技術開発本部で行っている「テクノフェア」の至近年のテーマである。